

は例えば日本人はお金は汚いものであると考える。身体の中で手は汚れるが洗えばきれいになると考えられ、下半身は本質的に汚いところとされているので、洗っても完全にきれいにならないとするのである。以上を要約すると、日本の衛生習慣は、内・外¹・上・下²清潔・不潔³浄・不浄(ケガレ)を表わしているといえる。

古代からの浄・不浄(ケガレ)の観念についての移り変わりをみると、『古事記』に伊弉諾尊が亡くなった伊弉冉尊のうじのわいた死体を見たためにケガレた身になるが、清めの儀式を行うことにより日本の主要神が生まれたとある。天照大神は伊弉諾尊が左の目を洗ったときに、須佐之男命は伊弉諾尊が鼻を洗ったときに生まれたという。これから考えられる『古事記』の世界は次の三つの対立軸の形でくり広げられている。すなわち浄・不浄(ケガレ) Ⅱ 生・死 Ⅱ 上・下である。『祝詞』では神の怒りを誘う行為を罪とし、これをなくすために祓や禊が行われた。これが儀礼化して天皇が主宰する祭式となつたのは律令体制になつてからである。

一方新しい思想を持った仏教が五三八年に日本に伝えられ、鎮護国家を唱えた貴族仏教が平安朝に入ると、その教えは一般庶民にわかり易いように説かれるようになり、さらに殺生戒を中心とした仏教の戒律思想が急速に広まった。平安朝の後半期になると、戦争や疫病の蔓延がさらにはげしくなり、一般庶民の不安が一層広がった。仏教は現世は穢土であり、往生して浄土へ行くためには戒を守らねばならぬと力説

した。また朝廷は「天下触穢」の布告を出し、このケガレを消すために種々のタブーを出した。かくして浄・穢の観念が民衆の間に定着していった。

さいごに現代日本の衛生観念、治療力の観念と古代日本の浄・不浄(ケガレ)の観念との類似性についてみると、(1)古代日本の不浄(ケガレ)観は、うじのわいた身体、死体または膿のわいている病人に触れることに関連しており、この事実は現代日本においてもそのままあてはまるものである。(2)古代において祓い清めの役割を担つた自然の諸力は、現代においても引き続き同様の力があると考えられている。(3)浄・不浄(ケガレ)の対立は観念的のみならず道徳的側面をもあわせ持っていることは、古代と現代とはよく類似している。すなわち、浄・不浄(ケガレ) Ⅱ 生・死 Ⅱ 上・下の観念では現代は古代と同じように文化の中に浸透しているといえる。

(平成六年二月例会)

横浜・太田陣屋の研究

中西 淳 朗

横浜の太田陣屋は、安政六年九月(開港三ヵ月後)に陸上警備の福井藩士を収容するために、大岡川をへだて太田新田の向い側の地(今日ノ京急日ノ出町駅周辺)に開設された。

しかし、現在の横浜には史料が残つて居らず、福井県立図

書館松平文庫に「太田陣屋旧建物配置図」が残っている。この図によると、その敷地は一万一千九百余坪とあり、低地ではあるが広大な用地で、神奈川奉行所が支配した。

その後、幕府の政策転換により、フランスの支援の下に幕軍を近代化するため、慶応元年四月より開校した横浜仏語伝習所の生徒の三兵（歩兵、砲兵、騎兵）伝習用の屯所にすることなり、同年十二月、陸軍奉行支配にかわり大改築が行われた。

英医ジョセフ・B・シッドールの一八六九（明治二年）三月三十日付の英国外務省宛報告書によると、戊辰戦争の折、太田陣屋の伝習長屋が新政府の軍陣病院の病棟となったと記している。病棟に利用された長屋（兵舎）は、*『三十ヤードの長さの、二階建ての高さの建物が六棟あったが、これらはかつて厩として使用され、厩の上に兵士用の部屋がついていた。この二階部分は換気がよく、部屋も連続していたので病棟にされた。』*（中須賀哲朗氏訳）とある。

問題は厩が存在した証拠にかかっているが、青山学院大学の岡宏三氏の研究「慶応三年アラビア馬の受領と小金牧牧士の飼育伝習御用」（一九九〇年・私家版）により、同年四月下旬、ナポレオン三世から幕府に軍馬改良用におくられた種馬二十六頭が太田陣屋に入り飼育伝習が約一年間行われた史実が明らかにされた。これをふまえて「The Far East」誌上にあるという有名な太田陣屋の写真（一時は修文館と解説されたこともある）を改めて見つめると、長屋の一階部分はまさに厩であ

り、シッドールの報告書に全く一致していることを発見した。この兵舎の長さは三十ヤード（十六間）で、総二階である。幅を横浜仏語伝習所の初期建物に準じて割り出すと五間となる。

写真では中央に出入口を認めるので、これを二間とすると、兵舎の二階は七間×五間の広間が階段部分の左右に存在することになる。

即ち、一棟の長屋に六十六畳の大部屋二室を作ったと考えられ、この大部屋の中央に一間の廊下を作り、両側の細長部屋を床上三尺位を板で区切り、十三の小区画となし使用したと考えられる。（大部屋をい・印とかる・印、区切った小区画を一番、二番と呼んだ）

一患者当り四畳が割当てられた計算となる。つまり、一長屋に二大部屋を有し、夫々が十三の小区画となっており、一長屋に二十六名が入院できた。長屋は六棟あったので、合計一五六名を収容できた。『横浜病院の日記』によると、予備の大部屋が一ツあるのでフル回転で一六九名入院させられる。即ち太田陣屋こそ横浜軍陣病院の基幹病院であった。

（平成六年三月例会）